

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部・哲学専修2年 深町 朱梨

私はフランス・ストラスブールでの市内見学・大学図書館見学について書きたいと思う。

ストラスブールに着いて1日目にプティ・フランスやストラスブール大聖堂などを見学した。プティ・フランスでは、中世の街並みをそのまま残す美しい川沿いの家々が印象的だった。かわいい色の壁と木組みでできた家が川にうつっている風景は、まるで絵本の世界に迷い込んだようであった。ストラスブール大聖堂では、その荘厳な鐘の音と鮮やかな光を放つバラ窓に圧倒され、とても神聖な気持ちになった。特にライトアップされた姿は何度見ても息を飲む美しさだ。夜はストラスブール大学日本語学科のシャル先生と食事をした。先生はとてもエネルギッシュな方で、会話を交わすうちにアルザス地方への興味がかきたてられ、今後の勉強や翌日に控えたワークショップへの意欲が刺激された。食事ではアルザス地方の伝統料理、シュークルートを堪能した。

二日目にはストラスブール司教の元住居・ロアン宮を利用した美術館と、ストラスブール大学を見学した。ロアン宮はストラスブール大聖堂の真向かいにあり、美術・装飾・考古学資料のそれぞれが展示してある3つのミュージアムで構成されている。貴重なコレクションやナポレオンも宿泊したという部屋を見ていると、当時の情景が目に浮かぶようだった。次にストラスブール大学内を見学した。特に印象に残ったのは大学の寮や、大学内の語学学校、キャンパス内の雰囲気だ。引率していただいた横田さんが当時ストラスブール大学に通っていたこともあり、「もしここに留学したら…」と、大学生活をリアルに想像することができた。

帰国前日には国立図書館をストラスブール大学日本語学科の生徒と共に見学した。図書館は古い建物の面影を大切にしながらも光を多く取り入れた近代的な設計が印象的だった。例えば、昔の装飾の後がついた柱を新しい建物にも使用していたり。蔵書の古さ・貴重さにも驚かされた。この街の「知」がいかに歴史深いものかということが感じられた。

アルザス地方は3度ドイツになり3度フランスになった、とシャル先生はおっしゃった。その壮絶なバックグラウンドは写真や文書で日本から知るだけでは十分に感じることはできない。実際にその空気に触れ、食べ物を食べ、街並みを歩いて初めてわかることがある。また、海外に留学することはとてもハードルが高いことだと思っていたが、実際に大学を見学してみるととても身近なこととして想像できるようになった。この貴重な機会を得た経験を、今後の進路や将来のことを考えるときに生かしていきたい。